

如くに成立し、④対象が作用をなすことは、あたかも、夢における損害に作用がある如くに成立する、という応答である。

したがって、右の世親の応答によるかぎり、唯識説は實在論者に反駁されるような単なる主観的な觀念論とは明らかに異なっている。なんとすれば、世親は対象を心のあらわれとする唯識という主観的な觀念論の立場をとっているが、しかし、世親の唯識の立場においては、A対象が一定の場所や時間に存在し、一個人の主観的な意識の流れに決定されずに存在し、現実的な作用をもつVという、対象の客観的な實在性が認められているからである。世親の唯識の立場は、唯識という立場をとる点で實在論ではないが、だからといって、實在論にたいする觀念論でもないような、いわば、主観的な觀念論と客観的な實在論との二つの意味をもつ如き立場であって、対象を心の思いのままにあらわしたすというような、都合のよい主観的な唯心論ではない。世親の唯識の立場は、われわれの心のあらわすところのものが、われわれの心から独立した客観的な實在性をもち、逆に、われわれに働きかけるという如き意味をもった立場であって、むしろ、きわめて都合の悪い唯心論というべきである。世親の唯識説は、われわれが自己のつくったものに逆に動かされ悩まされる自業自得の姿を教えるものであり、ここに主観的な觀念論と全く異なっているのである。世親の唯識説は、われわれの苦悩の現実の真相を自覚せしめんとする教えである。唯識が夢の喩えによって説明されるのは、ここに理由があると考えられる。

観世音菩薩と無量寿經

芳 岡 良 音

観世音菩薩は光讚般若經等の多数の初期大乘經典に現れて居り、大乘仏教成立の当初から知られていた菩薩で諸厄解除をその信仰の主眼とするものであったことが、初期無量寿經(大正藏一・二368b)華嚴經入法界品(同九718b)法華經(同九128c—)思益梵天所問經(同二五48b)の文によって明かである。観音の原語は Avalokiteśvara (觀自在) である、印度教の祝を連想し易いが、Avalokitaśvara (觀世音) というのが古い本来の名称であると見るのが穩当のようである。觀世音というのは一般に世間の音声を観ずるという意味だとされているが、これは羅什訳の法華經普門品に「聞是觀世音菩薩、一心稱名、觀世音菩薩、即時觀其音声、皆得解脫」とある所から生じた解釈で、梵本や竺法護訳正法華經では菩薩の名号を聞き、或は受持すれば解脫を得るが故に觀世音と名けるとあり、華嚴經入法界品には「出微妙音而化度之」とあるので、この音 svara は菩薩の名号の微妙な音声を意味するようである。初期無量寿經では觀音は蓋樓亘となつてゐるが、これは Avalokita 之音を写したもののように思われる。寂天の大乘集菩薩學論に觀察世間經 Avalokitaṇa-sūtra という經典が引用されているが、これは Mahāvastu の中の釈尊の成道の伝承の記事の中に全文

収録されているAvalokita-sūtraと同一のものである、この經典によれば、釈尊が菩薩として菩提樹下の宝座に於いて、世間の憐憫、人天の利益安穩のために普ねく觀察せられ、(Mahāvastu II. 294) 明晰人を超え優れたる天眼によりて、業報によって善趣に赴ける一切の有情を觀じ、(383) 襲い来た惡魔の軍勢を悉く粉碎降伏し、(315—343) 衆生の業繫より解脱する道を体得され、(384, 345) 人天を魔障より解放し、安穩を得しめる道を切り開かれたことを述べ、「一度なりとも善逝の御名にたのむことより生ずる功德は百千無量なり」(396) 如來に加被を求むるものは「邪惡なる魔の力に落ちず、人も幽鬼も彼等害する機を持たざるべし」と説き、(297) 困難なる菩薩行を成就し、降魔の威神力を獲得された威徳に信賴し、仏塔を供養するものは、火も毒も兇器も之を害する能わず、現世に於いてはあらゆる災厄、病苦、身体の不具や醜惡を免れ、天寿を全うし、富貴名譽を得、死しては天界に生れて無量の福を得べきことが繰返し強調されている。(362—397)

以上によって觀音信仰が Avalokita-sūtra の所説に由来することが推察されるのであるが、これを傍証する文献が一つある。華嚴經入法界品に觀世音菩薩が金剛宝座に結跏趺坐すと記し、(大正藏九 718 a, 同一〇366 c) 大唐西域記に伽耶城菩提樹下の金剛宝座の南北境界に兩軀の觀世音菩薩像が東面して坐していることを伝えているのがこれである。(同五一 915 b) 元來菩薩というのは因位の釈尊その人に名けたものであったので、その修行は衆生利益のためのものであり、仏の威徳はこの菩薩行から生れたものであるという所から、大乘の諸菩薩、特

に觀音の信仰が成立したと考えられる。

無量壽經に觀音勢至の二脇士が説かれているのは、Buddhavaṃsa に過去の諸仏の之首の弟子、女弟子、常侍の信士、信女の名を一々記している伝承を受けていると思われるが、(南伝藏四一 247—256)、西域記の菩提樹(仏像が現れる以前は、菩提樹は直接仏の存在を象徴するものであった)の西側に觀音像があったという記事は、觀音が仏の脇侍とされるに至った過程を暗示するものとして、興味深い記録である。また初期無量壽經に觀音の災厄解除の中興官の急恐怖を解脱する利益だけが記されているのは、Puṣyāmītra の破仏によって代表される、印度教國教化の趨勢に伴う官憲の迫害の生々しい印象のためであったように思われる。このような破仏の惡魔的な仕業にも拘らず、金剛宝座の不動、三宝の不滅を確信し、宣説したのが、觀音信仰の本来の核心であったのであろう。Avalokita-sūtra にも仏法が排斥される時に、これを支持するものの功德が特に大なることが説かれている。(Mahāvastu II 371-373) それが Avalokita-sūtra にも現れている当時の現世利益的な讚仏乗の風潮から、法華經普門品等に見られるような觀音信仰になって行ったのであろう。之に反して後期無量壽經では興官の急恐怖解除の記事が全く削除されて了っているのは、現世利益信仰を排除する無量壽經の基本的性格が明確になって行ったためと見てよいであらう。

追記 羽塚堅子氏の「御真筆和讃の四声点について」の原稿を頂戴しましたが、印刷上の都合により掲載出来ませんでしたことをお詫び致します。